千葉市内出土の人面付土版
－内野第１遺跡・犢橋貝塚出土資料から－

田中　英世

はじめに

平成７年に千葉市花見川区宇那谷町『内野第１遺跡』から完形の人面付土版が出土した。調査を担当した関係で類例を探索した結果、千葉市立加曽利貝塚博物館に犢橋貝塚出土の人面付土版が展示されていることを知った。今回は、これらの土版について関連資料を通じて紹介を行いたい。

１．内野第１遺跡出土例（第１図１～５）

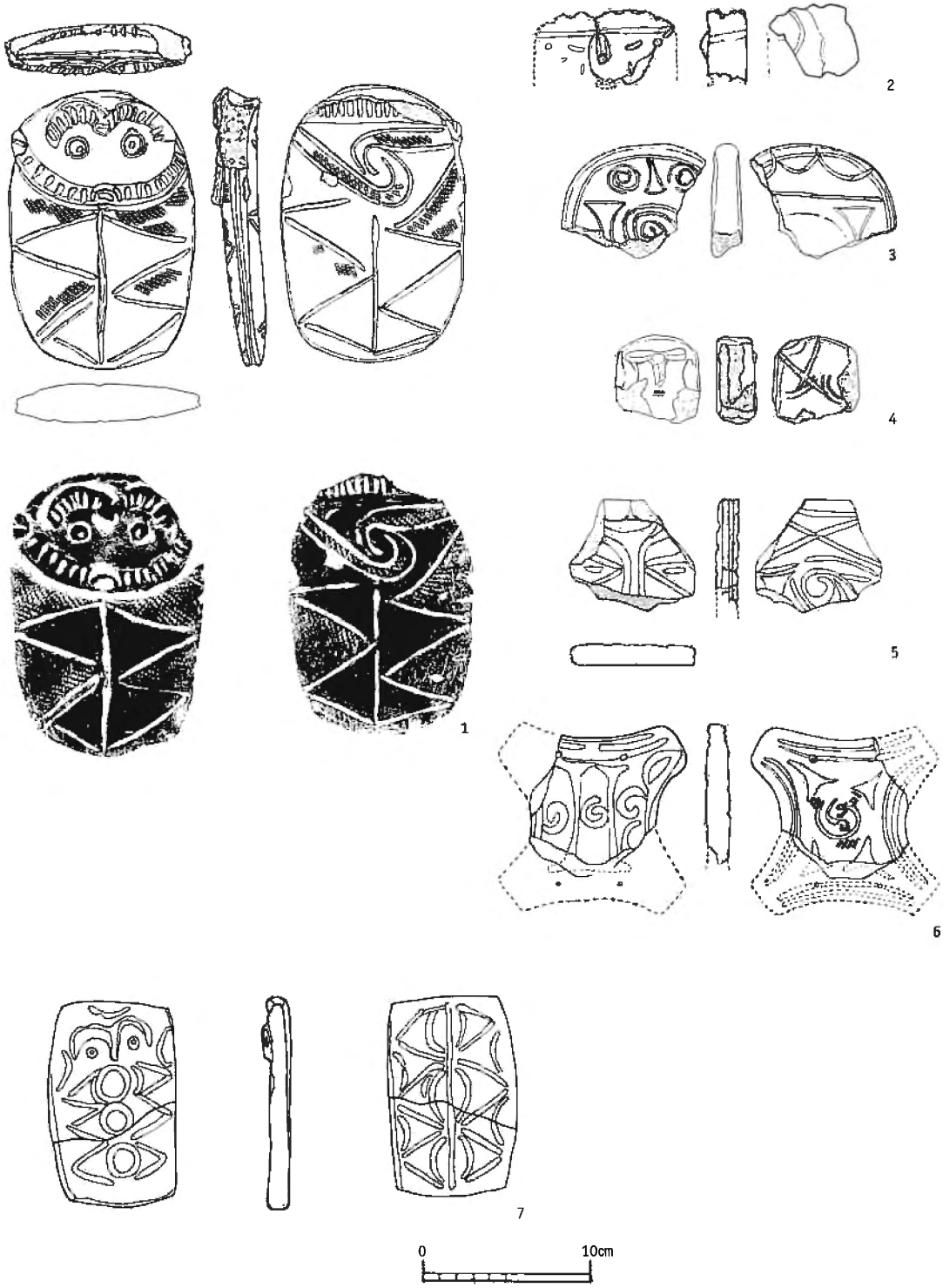
内野第１遺跡は、平成元年から平成８年にかけて発掘調査を行った縄文時代中期から晩期及び古墳時代前期を中心とする遺跡で、既に報告書が刊行されている（文献１）。土版は34点が報告されているが、今回新たに２点が発見され、計36点となり、内５点が人面付土版である。

１は楕円形を呈する完形品で、縦16.5cm、横11.4cm、厚さ2.8cmを測る。表面上半部に指頭圧痕を加えた隆帯により顔面部を形成し、眉を同様の手法で表現し、口の部分には刺突を加えている。目は小円の貼り付けに刺突を行い、表面下半部は正中線と磨消縄文による雷文を施している。裏面上半部には安行３ｂ式土器に認められる入組状の文様を施し、下半部と表面は従来の姥山Ⅱ式土器と呼称される土器に特徴的な雷状の磨消縄文を施しており、顔面描出は埼玉県雅楽谷遺跡出土品（第３図11）に類似する。

２は方形を呈する顔面部右破片で、上縁に平行する沈線で眉を表し、それに直角な隆帯により鼻を描出している。目はヘラ先による刺突で右上がりに表現され、その下に同様の刺突が縦に加えられている。裏面は破損が著しく文様構成は不明であるが、渦巻文またはＳ字状文が施されていると思われる。右端部に懸垂孔が認められる。断面は2.8cmと厚く、中央部が窪み、角縁部には糸かけと思われる凹線が認められる。茨城県小山台貝塚出土品に類例が求められる。

３は楕円形を呈し、表面は渦巻文の刻線で目を表し、その間に刻線により三角形を描出し鼻を表現している。胴部の中央に渦巻文で口を表現し、両側を刻線により対向三角文を描出する。裏面は頭部に弧線文、胴部には三角文を刻線で描出する。下半部を欠損しているが、三角文が対向三角文を形成する可能性がある。器面は磨かれ光沢を帯びる。

４は方形を呈する上半部で、隆帯により眉と鼻を表現し、刺突により口を表し、頬の部分に沈線を加えている。裏面は浅い沈線を施している。土偶の頭部とも思われるが、断面形態から土版として捉えた。



第１図　千葉市内出土の人面付土版関連資料
１～６（内野第１遺跡）　７（犢橋貝塚）

５は今回新たに発見されたもので、報告書には掲載されていない。方形を呈すると思われ、上縁に水平な１本の沈線と中央に垂下する２本の沈線を施文し、その両側に沈線により雷文を施すことにより眉を描出し、短い沈線により目を表現している。裏面は上半部にＸ状の沈線を施文し、中央部左側には三角文を、右側には渦巻状の入組文を施している。表面の文様は従来の姥山Ⅲ式土器の基本モチーフであり、裏面の渦巻状の入組文は安行３ｂ式土器に認められるモチーフである。安行３ｂ式期に比定される[註1]。

２．犢橋貝塚出土例（第１図７）

犢橋貝塚は花見川の支谷に立地する縄文時代後期から晩期の大型馬蹄形貝塚で、古くから発掘調査が行われているが、正式な報告は成されていない[註2]。

人面付土版は『千葉市史　資料編１　原始古代中世編』に助川寛氏蔵[註3]として表裏２面の写真が掲載されている（文献２）。縦12.2cm、横17.5cm、厚さ1.0cmの方形を呈し、下半部1/3は欠損して石膏で復元されている。表面は曲線的な隆線により眉と鼻を、小円形の貼り付けに刺突を加え目を、両側に弧線文を配して耳を表現している。顔面部以下は、中央に３段の円形文を配し、その左右に雷文を施し、上段の円形文で窪み、口を表現している。裏面は表面と同様の円形文と雷文を施した後、中央に正中線を、外縁部に弧線文を加えている。これらの文様構成は鷹野光行氏によるA1類（文献３）、稲野彰子氏による第１種ＡＩ類（文献４）とされたものである。このモチーフの土版は多く、我孫子貝塚出土例（文献５）、後谷遺跡出土例（文献６）に類例がある。特に結城遺跡出土例（第３図７）（文献７）の表面には沈線による顔面描出がなされている。なお本例は『千葉市史　資料編１　原始古代中世編』では安行３ａ式に比定されているが、体部の円形文と雷文は従来の姥山Ⅲ式土器の基本モチーフであり、安行３ｂ式期に比定される。

３．千葉県内出土の人面付土版（第２図１～10）

千葉県内で土版が出土した遺跡は32遺跡以上に上る[註4]。このうち人面付土版と報告されているのは10例である。貝ノ花貝塚出土例（１）は隆帯により眉と鼻を描出し、刺突により目を表現し、下半部と裏面は三叉文と三角文の磨消縄文を施す。安行３ｂ式期に比定される（文献８）。八木原貝塚出土例（２）は、実測図のみで詳細は不明であるが、糸巻き型を呈し、上縁に沿って隆帯で眉を、沈線で目と口を表現する。表裏面にはＩ字文を中心とする入組文が施される。安行３ｃ式期の典型的な土版である（文献９）。下ケ戸宮前遺跡からは５点出土している（第２図３～７）。３は直線的な隆帯により眉と鼻を表し、円形貼り付けにより目を表現し、顔面の両側には入組三叉文が施される。５は直線的な隆帯により眉と鼻を表し、窪みを加えた円形貼り付けにより目と口を表現し、口の両側には幅の狭い連続三角文を施している（文

第２図　千葉県内出土の人面付土版
１（貝の花貝塚）　２（八木原貝塚）　３～７（下ケ戸宮前遺跡）　８・９（吉見台貝塚）　10（山野貝塚）

献10)。吉見台貝塚A地点からは2点出土している（8・9)。8は隆帯により眉と鼻を表し、眉部の隆帯には刻みを施し、目は粘土瘤を貼付し、頭部には円孔を施している。表面の胴部以下と裏面にはI字文が施される。9は隆帯により眉と鼻を表現し、円形及び楕円形の窪みにより目と口を表している。裏面は中に刺突を加えた沈線が雷状に施されている（文献11)。山野貝塚からも1点出土している（10)。直線的な隆帯により目と鼻を表現し、裏面には文様がない。方形を呈し、土偶とも考えられる（文献12)。なお、大野延太郎氏により、東金野井貝塚・我孫子貝塚出土例が人体表現の土版として揚げられているが、再考の必要がある[註5]。

4．関東地方出土の人面付土版（第3図1～20）

人面付土版の類例を探索するにあたり、関東地方の土版出土遺跡の集成を行った。土版の出土遺跡集成については、大野延太郎氏が明治30年（1897）に11遺跡16点を揚げたのを初めとし（文献13)、池上啓介氏は昭和11年（1936）に東北・関東地方の122遺跡206点の地名表を作成し（文献14)、以後の研究の基礎をなした。今回の集成は稲野彰子氏による『岩版・土版出土遺跡－東北・関東地方－』（文献15）及び鈴木敏昭氏の集成（文献16）を基礎資料としたが、茨城県については瓦吹堅氏による『茨城県土版覚書』（文献17）に拠った。人面付土版については、大野延太郎氏が大正7年（1918）に36個の土版・岩版について個々の解説を行なっている（文献5)。池上啓介氏は昭和8年（1933）の『土版・岩版の研究』（文献18）において、土版と岩版を各々A型（楕円形)・B型（四角形)・C型（人面形）に分類し、C型（人面形）土版については「厳密に言えば、前者の何れかに入るべきものあり、また独立せしむべきものもある。多くは柔和な女子の顔面やシンボルを象徴している。」として、下総から3点出土しているのみとしている。また大野延太郎氏が人面表現とした「山」字文に付いても検討を加え「単なる一紋様というよりは、一つの記号、符蝶のような感が多分に持たれ、他の紋様はこれに附随する従属的なもの」として、関東地方の土版に限られた文様としている（文献19)。戦後は、戦前の人面付土版を中心とした土版研究に批判検討が加えられ、天羽利夫氏の論文を皮切りとして、岩版・土版と土器文様との対比による編年的研究が確立した（文献20・3・4)。これらの研究で、岩版・土版の発生は東北地方であり、その発生形は岩版であり、発生形は顔部表現をもたないことから土偶とは別形式であること（文献20)、土版に認められる貫通孔は関東地方で発生し、東北地方では大洞C1式期以降にしか存在しないこと（文献21)、関東地方の人面付土版については、安行3b式期段階に東北地方とは異なる顔面意匠が発生すること（文献22)、顔面描出の方法に幾つかの手法があること（文献23）が指摘されており、現在新たな段階を迎えている。

関東地方の人面付土版の顔面描出の方法は次の類型に分けられる（第3図)。

a）顔面全体に曲線的な隆帯により目と眉を描出するもの。形態は楕円形を呈する。千網谷戸

第３図　関東地方周辺出土の人面付土版（S≒1/6）
１～４（小山台貝塚）　５・６（沓掛遺跡）　７（御岩神社）　８（結城遺跡）　９・10（柏井遺跡）
11・12（雅楽谷遺跡）　13（東北原遺跡）　14・17（藤岡神社遺跡）　15（寺野東遺跡）
16（乙女不動原北浦遺跡）　18（赤城遺跡）　19（奈良瀬戸遺跡）　20（大森貝塚）

遺跡・後谷遺跡・奈良瀬戸遺跡出土例（19）は目や口を省略しており、裏面は文様を持たない。横塚古堂遺跡出土例の裏面にはＣ字文等の東北系の文様が施される。

ｂ）表面上半部にａと同様の曲線的な隆帯により目と眉を描出し、下半部及び裏面には同時期の土器に認められる雷文や重菱文等の文様を有する。貝の花貝塚・結城遺跡（８）・地獄田遺跡出土例が揚げられる。二十五里遺跡出土例は、表裏面に「の」字状の渦巻文が複雑に展開している。大塚遺跡出土例は、表面文様の正中線が消滅し横分割の文様構成がとられており、下半部の渦巻文を伴う菱形文のモチーフとあわせても後出のものと思われる。

ｃ）ｂの隆帯が直線的なＴ字形になるもの。小形の楕円形を呈するものが多い。赤城遺跡出土例（18）は対向三叉文により顔面部を区切り、その下に横位のＣ字状の入組文を施している。乙女不動原遺跡出土例は裏面にＩ字状文を施す。このような顔面描出の例は福島県荒屋敷遺跡・羽白Ｃ遺跡でも出土しており、内野第１遺跡出土例（第１図４）も含まれる。

ｄ）土版上縁に沿うような緩やかな曲線の隆帯により眉と鼻を描出するもので、形態的には撥形が多い。東北原遺跡（13）・大森貝塚（20）・雅楽谷遺跡出土例（12）のように、大形で目・口・鼻を明確に表現するものと、奈良瀬戸遺跡・東北原遺跡出土例のように小形で目・口を省略しているものがあり、胴部にはＩ字文や入組文が施文される。また沓掛遺跡（６）・羽毛田Ａ遺跡出土例のように乳房表現をとるものがあり、土偶との関連が考えられる。

ｅ）沈線により眉を表現し、隆帯により鼻を描出するもので、形態的には方形が多い。小山台貝塚（４）・雅楽谷遺跡出土例があり、内野第１遺跡出土例（第１図２）も該当する。

ｆ）隆帯や沈線により顔の輪郭を明確に区別する土偶的色彩の強いもの。駒寄遺跡・広畑貝塚・雅楽谷遺跡出土例（11）が揚げられる。広畑貝塚出土例の顔面描出手法及び裏面の連続入組三叉文に対しては、鈴木正博氏により分析が加えられており、安行３ｂ式期に比定される（文献47）。下沼部貝塚出土例は沈線により顔面部を区切り、裏面は三叉状入組文を施している。安行３ｄ式期に比定される。金洗沢遺跡出土例は他の例とは異なり、逆三角形の顔面部を貼り付けており、赤彩痕が確認されている。裏面の渦巻文より安行3ｃ式期のものと思われる。内野第１遺跡出土例（第１図１）もこの類に該当する。

ｇ）円形や渦巻の沈線や短沈線で目を表現するもの。谷田遺跡出土例は明確に目と鼻を意識しており、胴部の渦巻文と共に岩版の文様描出に類似する。西ケ原貝塚出土例は目を円形の沈線で表し、鼻は正中線により表現している。内野第１遺跡（第１図３・５）も含まれる。

ｈ）懸垂孔により目を表現しているもの。荒屋敷遺跡出土例は、中央の渦巻状の沈線により鼻と口を表現しており、針ケ谷遺跡出土例でも、表面上半の文様を鼻と思われる円形貼り付けを行うことで人面を表していると思われる。なすな原遺跡の報告では、人面を模したというより、人間の器官の一部を抽象化することにより、土版や岩版に超自然的かつ呪術的な力を与えたのではないかとの指摘がなされている。

第１表　千葉県および関東地方周辺出土の人面付土版出土遺跡一覧表

No.	遺　跡　名	No.	遺　跡　名
1	千葉県千葉市内野第１遺跡（文献１）	27	栃木県小山市乙女不動原北浦遺跡（文献32）
2	千葉市犢橋貝塚（文献２）	28	小山市寺野東遺跡（文献33・50）
3	松戸市貝ノ花貝塚（文献８）	29	宇都宮市針ケ谷遺跡（文献33）
4	四街道市八木原貝塚（文献９）	30	藤岡町後藤遺跡（文献33）
5	我孫子市下ケ戸宮前遺跡（文献10）	31	藤岡町藤岡神社遺跡（文献51）
6	佐倉市吉見台貝塚Ａ地点（文献11）	32	益子町御霊前遺跡（文献52）
7	袖ケ浦市山野貝塚（文献12）	33	群馬県吾妻郡清水遺跡（岩版）（文献34）
8	茨城県日立市御岩神社（文献24）(註6)	34	桐生市千網谷戸遺跡（文献34・35）
9	ひたちなか市柳沢大田房貝塚（文献25）	35	埼玉県桶川市後谷遺跡（文献6）
10	水戸市金洗沢遺跡（文献26）	36	大宮市奈良瀬戸遺跡（文献36）
11	水戸谷矢田遺跡（文献27）	37	大宮市東北原遺跡（文献37）
12	友部町柏井遺跡（文献7）	38	岩槻市真福寺貝塚（文献27）
13	東村福田貝塚（文献27・28）	39	川口市大塚遺跡（文献22・24）
14	江戸崎町椎塚貝塚（文献28）	40	蓮田市雅楽谷遺跡（文献38）
15	茎崎町小山台貝塚（文献29）	41	蓮田市ささら遺跡（文献39）
16	土浦市上高津貝塚（文献28）	42	菖蒲町地獄田遺跡（文献40）
17	岩井市駒寄貝塚（文献28）	43	岡部町原ケ谷戸遺跡（文献41）
18	岩井市香取神社遺跡（文献28）	44	川里村赤城遺跡（文献42）
19	岩井市大口東浦遺跡（文献44）	45	東京都北区西ケ原貝塚（文献27）
20	古河市沓掛遺跡（文献31・33）	46	品川区大森貝塚（文献43）
21	三和町二十五里遺跡（文献７）	47	大田区下沼部貝塚（文献24・45）
22	協和町横塚古堂遺跡（文献24・33）	48	町田市なすな原遺跡（文献49）
23	結城市矢畑遺跡（文献27）	49	福島県いわき市真石遺跡（文献22・27）
24	結城市結城遺跡（文献７）	50	飯館村羽白Ｃ遺跡（文献46）
25	伊奈村神生遺跡（文献28）	51	三島町荒屋敷遺跡（文献33・46）
26	茨城県古河市羽生田遺跡（文献30）	52	石川町鳥内遺跡（文献46）

ｉ）中空土版と称されるもので、柏井遺跡から２点出土している（９・10）。

以上簡単に９類型に分類した。胴部文様から、ａ・ｂ・ｃ・ｇは安行３ｂ式期から安行３ｃ式期に比定され、ｄは安行３ｃ・３ｄ式期に比定されると思われる。

人面付土版は東北地方でも多く出土している他(註7)、新潟県や長野県でも出土している(註8)。東北地方のものは関東地方とは別系統のものであり、今回は対象から除外した。福島県においては関東地方と同系統のものが出土しており、対象に加えている。

おわりに

内野第１遺跡の発掘調査は平成８年に終了した。調査面積は93,635㎡に及び、調査地点は当初予定の河岸段丘上から次第に段丘末端部に移行し、遂には旧河川敷と思われる地点からも遺物の検出が認められる状況となった。近年、寺野東遺跡に代表されるように、内陸部における低段丘や自然堤防、あるいは台地末端部の埋没谷で、縄文時代後期から晩期にかけての遺跡発見例が多く、居住遺構と食料加工遺構がセットになって検出される例が多い。

内野第１遺跡では、今回紹介した人面付土版が属する安行３ｂ式期以降の遺構は明確に捉えきれていない。段丘末端部から円形を呈すると思われる柱穴群が検出されたほか、低地部分の黒色土から晩期前半の土器が多量に出土している。今回の資料紹介は、人面付土版を検出した平成７年頃の草稿にその後の資料を追加したものである。岩版・土版の研究は現在新たな転機を迎えており（文献48)、多量に出土した土偶等の位置付けも必要になってくる。今後は発掘調査の成果を踏まえた遺跡像の再構築という課題が残されているが、その道は遙かに遠い。

昨年６月に元野田市教育委員会社会教育課課長補佐の飯塚博和氏が亡くなられた。氏とは学生時代に加曽利貝塚大型住居跡の調査と、その後の千葉市史の資料作成を共に行った。５月のお見舞いの際には、野田市岩名貝塚出土の双脚異形土器の写真を示され、異形台付土器の終焉について熱心に語られ、大いに奮起させられた。今後は、内野第１遺跡の再検討を通してこれらの問題に取組むつもりである。心からのご冥福をお祈りする。

（千葉市教育振興財団　埋蔵文化財調査センター）

註

１）時期的には文様モチーフから、１・５は安行３ｂ式期に比定される。３については明確な時期は確定できないが、裏面外縁部の弧線文は１に施文されている雷文と共に施文されるケースが多く安行３ｂ式期と思われる。５の裏面の渦巻状の模様は、山内清男氏資料の真福寺貝塚出土の壷形土器に認められる他、茨城県御所内遺跡出土の土偶の文様に類似する。以上の点から、従来安行３ｃ式期以降に比定され、土偶や土版に多く用いられてきた対向三角文およびＩ字状文の発生が、安行３ｂ式期に遡る可能性がある。関連資料として掲載した６は、表面にＩ字状文を裏面に渦巻状の入組文と三叉状文を施している。裏面の文様は、余山貝塚・吉見台遺跡出土の土偶の背面の文様と共通しており、５に後続する。前浦式期の古い段階に比定され、この段階ではＩ字文が既に成立していることが窺える。
石橋克宏 1991 『銚子市余山貝塚』㈶千葉県文化財センター
堀越正行 1993 「Ｉ字文土偶、その系統と分布」『埼玉考古』第30号

２）大正15年（1925）の東京人類学会遠足会をはじめとし、昭和22年（1947）及び23年（1948）に吉田格氏が、昭和26年（1951）に明治大学及び東京学芸大学が、昭和31年（1956）に

明治大学が、昭和38年（1964）に明治大学及び千葉大学が発掘調査を行っている。概略について『千葉市史　原始古代中世編』（1974）『千葉市史　資料編１　原始古代中世編』（1976）『千葉県の歴史　資料編　考古１（旧石器・縄文時代）』（2000）に述べられているが、吉田格氏の調査記録（吉田　格 1951 「千葉県犢橋貝塚」『考古学ノート』第５号）が欠落している。

立正大学学園 1990 『吉田格コレクション　考古資料図録』に再録

3）助川寛氏寄贈資料については、阿部芳郎氏により一部報告がなされているが、詳細は不明である。それによれば、氏は千葉県を中心とした遺跡の踏査を行っており、その資料は東北・北海道まで及ぶ。特に昭和10年前後は印旛沼周辺の遺跡を集中して調査した痕跡が伺えるという。

阿部芳郎 1990 「千葉県佐倉市山崎貝塚とその土器」『貝塚博物館紀要』第17号

4）千葉県内の土版出土地は、野田市東金野井貝塚・野田貝塚・内町貝塚・流山市上新宿貝塚・上貝塚・松戸市貝の花貝塚・我孫子市我孫子貝塚・下ケ戸宮前遺跡・沼南町岩井貝塚・市川市堀之内貝塚・佐倉市吉見台遺跡・井野長割遺跡・遠部台貝塚・坂戸草刈堀込遺跡・宮内井戸作遺跡・成田市殿台遺跡・印西市天神台貝塚・酒々井町伊篠白幡遺跡・鎌ケ谷市中沢貝塚・千葉市犢橋貝塚・園生貝塚・多部田貝塚・加曽利貝塚・野呂山田貝塚・内野第１遺跡・四街道市八木原貝塚（千代田遺跡）・市原市西広貝塚・菊間手永貝塚・能満上小貝塚・君津市三直貝塚・袖ケ浦市山野貝塚・大網白里町沓掛貝塚・銚子市余山貝塚・木更津市林遺跡の計34遺跡が上げられる。また弥富貝塚出土の人面付土版の写真が下記に掲載されているが、遺跡が特定できなかった。佐倉市弥富川流域の遺跡とも思われる。

吉田　格 1973 『関東の石器時代』

5）東金野井貝塚出土例は左方を欠損しており、眉と右目は沈線と楕円形の磨消縄文により描出され、中央の菱形の窪みが口を表しているとされている。我孫子貝塚出土例は上部に谷の文字様で鼻を表し、その下の円形の窪みで口を表現しているとされている。上部の谷の文字様とされたのは「山」字状文と呼称されるもので、池上啓介氏により考察が加えられている（文献19）。

6）文献28では土版と記載されているが、文献22・24では岩版と記載されている。

7）東北地方においては、人体表現を有する岩板・土版は、初源形態では全く認められず、岩板・土版の中に占める割合は、大洞ＢＣ式期には約26％、大洞Ｃ1式期には約16％で以後減少するが、人体表現によって岩板・土版の形状が大きく変わることはなっかたとの指摘がなされている。

稲野彰子 1990 「土偶と岩板・土版」『季刊　考古学』第30号

8）新潟県元屋敷遺跡・長野県エリア穴遺跡等から出土している（文献33）。

〈文献〉

1）古谷　渉・田中英世他 2001 『内野第１遺跡発掘調査報告書』㈶千葉市文化財調査協会
2）千葉市 1976 『千葉市史　資料編１　原始古代中世編』
3）鷹野光行 1977 「関東地方の土版の分類について」『古代文化』第20巻10号
4）稲野彰子 1982 「関東地方における土版・岩版の文様」『史学』第52巻10号
5）大野雲外 1918 「土版・岩版の形態分類」『人性』第14巻９号
6）桶川市 1990 『桶川市史　第９巻（補遺編）』
　上福岡市歴史民俗資料館 1990 『第７回特別展　埼玉の土偶』
7）常総台地研究会 1972 『土偶・土版・岩偶・岩版（その１）』
8）八幡一郎他 1973 『貝の花貝塚』松戸市教育委員会
9）米内邦雄 1978 『八木原貝塚調査報告書』四街道遺跡調査会
10）石田守一 2000 「下ケ戸遺跡」『千葉県の歴史　資料編　考古１（旧石器・縄文時代）』
11）林田俊之 1999 『千葉県佐倉市吉見台Ａ地点』㈶印旛郡市文化財センター
12）野村幸希他 1973 『袖ケ浦町山野貝塚』㈶千葉県文化財センター
13）大野延太郎 1897 「土版ト土偶ノ関係」『東京人類学会誌』第12巻131号
14）池上啓介 1936 「土版岩版発見地名」『史前学雑誌』第８巻５号
15）稲野彰子 1983 「岩版・土版出土遺跡－東北・関東地方－」『考古遺跡遺物地名表』
16）鈴木敏昭 1992 「土偶研究の現状と課題－分類を中心として－」『シンポジュウム縄文時代後・晩期安行文化　発表要旨』
17）瓦吹　堅 1993 「茨城県内土版覚書」『奈和』第31号
18）池上啓介 1933 「土版岩版の研究」『上代文化』10
19）池上啓介 1935 「「山」字文のある土版」『ドルメン』第４巻６号
20）天羽利夫 1963 「亀ケ岡文化における土版・岩版の研究」『史学』第37巻４号
21）稲野彰子 1987 「岩版・土版の懸垂孔について」『北上市立博物館研究紀要』第６号
22）永峰光一 1977 「土版・岩版」『土偶・埴輪　日本原始美術大系３』
23）江坂輝弥・野口義磨他 1974 『古代史発掘３　土偶芸術と信仰』
24）甲野勇編 1964 『日本原始美術２　土偶・装身具』
25）藤代弥城 1974 「柳沢太田房貝塚」『那珂川流域の石器時代研究Ｉ』
26）瓦吹　堅 1991 「水戸市金洗沢遺跡の土偶」『茨城県立歴史館館報』第18号
27）東京国立博物館 1996 『東京国立博物館図録　縄文遺物編（土偶・土製品）』
28）磯前順一・赤澤　威 1996 『東京大学総合研究博物館蔵　縄文時代土偶・その他土製品カタログ』
29）図書刊行会 1976 『小山台貝塚』
30）鈴木素行・張替いずみ 1987 「資料紹介『古河市史資料編　原始・古代編』補遺」『古河市史研究』第12号
31）茨城県 1979 『茨城県史　資料編　縄文時代』
32）三沢正善 1982 『乙女不動原北浦遺跡』小山市教育委員会
33）茨城県立歴史博物館 1986 『特別展　古代人の顔－面影の世界－』
34）群馬県史編纂委員会 1986 『群馬県史　資料編１　原始古代１』
35）桐生市教育委員会 1984 『重要文化財　千網谷戸遺跡出土展』
36）柳田敏司他 1969 『奈良瀬戸遺跡』大宮市教育委員会
37）立木新一郎・山形洋一他 1985 『東北原遺跡－第６次調査－』大宮市教育委員会

38）橋本　勉 1990　『雅楽谷遺跡』㈶埼玉県埋蔵文化財事業団
39）橋本　勉 1985　『ささら遺跡』㈶埼玉県埋蔵文化財事業団
40）増田逸郎 1964　「埼玉県菖蒲町地獄田遺跡」『国大考古学会会報』第72号
　　埼玉県立博物館 1986　『古代の祭祀』
41）村田章人 1995　『原ケ谷戸・滝下』㈶埼玉県埋蔵文化財事業団
42）橋本　勉 1988　『赤城遺跡』㈶埼玉県埋蔵文化財事業団
43）E・Sモース 1827　『大森貝塚』（近藤義郎・佐原真訳）
44）瓦吹　堅 1979　「岩井市大口東裏遺跡出土の土版」『常総台地』第11号
45）江坂輝弥 1960　『土偶』
46）福島県立博物館 1993　『企画展　発掘ふくしま』
47）鈴木正博 1989　「安行式土偶研究の基礎」『古代』第87号
48）小杉　康 1986　「千葉県江原台遺跡及び岩手県雨滝遺跡出土の亀形土製品」『明治大学考古学博物館館報』№2
49）成田勝範・重久淳一他 1974　『なすな原－№1地区調査－』なすな原遺跡調査団
50）井上　武・江原　英 1997　『寺野東遺跡Ⅴ』㈶栃木県文化振興事業団
51）手塚達弥 1997　『藤岡神社遺跡（遺物編）』㈶栃木県文化振興事業団
52）後藤信裕他 2000　『御霊前遺跡Ⅰ』㈶栃木県文化振興事業団

追記

脱稿後、千葉県佐倉市宮内井戸作遺跡から人面付土版が出土していることを知った。種々の条件を考えると註4の弥富貝塚は井戸作遺跡の可能性が考えられるが、当時の記録等で確認する必要がある。

小倉和重「宮内井戸作遺跡」『財団法人印旛郡市文化財センター第4回遺跡発表会発表要旨』